



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレター 第637号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第637号. 京大東アジアセンターニューズレター 2016, 637

ISSUE DATE:

2016-09-19

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/216622>

RIGHT:

2016 年 9 月 19 日発行 第 637 号

CONTENTS

「中国経済研究会」のお知らせ.....	2
アジア自動車シンポジウム 2016 のお知らせ.....	3
読後雑感：2016 年 第 22 回 小島正憲.....	4
【中国経済最新統計】	11



「中国経済研究会」のお知らせ

2016年度第5回（通算第59回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりましたので、ご案内いたします。大勢の方のご参加をお待ちしております。

記

時 間： 2016年10月18日(火) 16:30-18:00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館地下1階
みずほホール AB

テーマ： 「人民元国際化のプロセスについて」

報告者： 蓋艶梅(北京行政学院副教授)

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行いますが、講師の都合等により変更する場合があります。2016度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期：4月19日（火）、5月17日（火）、6月21日（火）、7月19日(火)

後期：10月18日（火）、11月15日（火）、12月20（火）、1月17日（火）

（この研究会に関するお問い合わせは劉徳強（liu@econ.kyoto-u.ac.jp）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）



アジア自動車シンポジウム 2016 のお知らせ

主催

京都大学東アジア経済研究センター

共催

東京大学ものづくり経営研究センター

東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター

後援

京都大学東アジア経済研究センター支援会

アジア自動車シンポジウム 2016

新興国における部品現地調達を考える

—部品国産化ライフサイクルを一つの視座として—

■京都会場 2016 年 11 月 5 日(土) 13 時

京都大学経済学部三番教室(法経東館 2 階)

■東京会場 2016 年 11 月 7 日(月) 13 時

京都大学東京オフィス(新丸の内ビルディング 10 階)

13:00-13:20 挨拶

東京大学ものづくり経営研究センター ディレクター 新宅 純二郎
東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点長 丸川 知雄

13:20-14:40

問題提起: 部品国産化ライフサイクル 京都大学 経済学研究科 教授 塩地 洋

14:40-15:10

サプライチェーンの複雑化と深層の現地化 東京大学 経済学研究科 教授 新宅 純二郎

15:30-16:00

日系サプライヤーの現地化基本戦略 立命館大学 経営管理研究科 准教授 佐伯 靖雄

16:00-16:30

現地 2 次サプライヤーの技術能力—深化を制約するか 桜美林大学 経営学研究科
教授 井上 隆一郎

16:30-16:50

総括コメント 東京大学 社会科学研究所 教授 丸川 知雄

16:50-17:00

閉会挨拶 京都大学 経済学研究科 准教授 田中 彰

17:10-18:30

懇親会 参加費 2000 円(支援会会員は無料)

参加の御申込は、塩地 shioji@econ.kyoto-u.ac.jp 宛に、①会場名、②氏名・所属、③懇親会出欠を御連絡ください。シンポジウムの参加費は無料、懇親会は 2000 円です。ただし支援会会員は懇親会も無料です。

東京会場は定員 90 名、京都会場 200 名です。お早めにお申し込みください。

なお東京会場は会場が小さいため、御申込は支援会会員のみとさせていただきます。

支援会入会につきましては塩地までお問い合わせください。

読後雑感：2016 年 第 22 回

16.SEP.16

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事
株式会社小島衣料オーナー
東アジアセンター外部研究員
小島正憲

1. 「がんは自然に消える」 2. 「養老孟司の人生論」 3. 「大往生」
4. 「老夫婦が壊される」 5. 「人生を祝福する“老い”のレッスン」

1. 「がんは自然に消える」 川嶋朗著 宝島社新書 2016 年 8 月 19 日

副題：「医者に頼らず病気を治す 30 の方法」

帯の言葉：「余命宣告から生還した 16 人の奇跡のエピソード」

久しぶりに、現代医療世界の解説本を読んだが、本書は意外に面白かったし、これからの私の生き方への参考ともなった。本書で川嶋氏が展開しているのは、ひところ流行だった「がんとは闘うな」という主張ではない。川嶋氏は、たくさんの「がんの治癒法」を、「統合医療」として本書で紹介している。しかも、「私は常々、“統合医療をやる人間は、西洋医学”でも一流でなければいけない」と言っています。なぜなら、今の医療体系では、西洋医学が主体ですから、西洋医学の分野で二流三流だと、せっかく西洋医学以外の医療技術を学んで患者さんのために提供しようとしているのに、”あいつは（西洋医学では）二流の医者。だからあいつの言うことは信用ならない“そう結論付けられてしまうからです。もうひとつの理由は、医者の勤めとして、まずは西洋医学の最高の知識を患者さんに提供してほしいからです。西洋医学のなかに患者さんの病気を治せる方法があるのに、それを医者が知らなかったら、患者さんが不利になってしまいます。西洋医学のよさと限界について、最新の知識を提供できなければいけないと私は考えています」と書いている。この川嶋氏の姿勢とそれを貫徹している努力には、頭が下がる。

川嶋氏は、「医者でも、がんの根本的な原因はわからない」と書き、「がんが発生する仕組みはまだはっきり解明されていないものの、本来なら人間が持っている免疫システムが働いて、がんは自然消滅するはずなのです。しかし、暴飲暴食やストレス、運動不足、体の冷え、不規則な生活などによって、免疫力

が低下してしまい、がん細胞が生き残って増殖してゆくことがあります。そのため、怖いがんを発症してしまうのです。つまり、がんを治すには、自己治癒力が落ちてしまった根本原因を探ることが、治療の第一歩になると私は考えています」と書いている。

さらに川嶋氏は、「自律神経のバランスが崩れると免疫力が落ちてしまう」、「ストレスによる活性酵素の増加で免疫力が低下する」と書き、「慢性的にストレスを感じる。すると、交感神経が過緊張状態になる。そして、活性酵素が増加してコピーミスが起こって、がん細胞が生まれ、さらに相対的にがん細胞を処理するリンパ球が減り、処理機能も低下してがんを発症する」と書き、「私は体の不調のほとんどはその人自身に原因があると考えています。病気の根本的な原因は患者さん自身にあり、それに気付くことができるのは患者さんだけだと考えています。それに気付いて、自分を正せる患者さんが、西洋医学の常識では信じられないような奇跡を起こすのです」と書いている。

川嶋氏は、西洋医学の相補・代替医療として、「①伝統医学：漢方薬、鍼灸、気功、按摩（マッサージ・指圧）、整体、操体、アーユルヴェーダ、ヨガ、（チベット）密教医学、ユナニ医学、ジャムウ、魔法医学。②現代医学に対抗して生まれた比較的新しい医学大系：アロマセラピー、ホメオパシー、バッチフラワーエッセンス、オステオパシー、カイロプラクティック、温熱療法、温泉療法。③現代医学だが代替療法と呼ばれるもの：細胞免疫療法、がんワクチン、放射線ホルミシス、キレーション、メソセラピー。④栄養療法：薬膳、断食療法、マクロビオティック、ゲルソン療法、サプリメント、植物療法。⑤心身相関係：サイコセラピー的なもの、ボディワーク的なもの、エネルギー療法的なもの、五感を活用するもの。⑥その他：波動療法、O・リングテスト」を上げ、代表的なものを詳しく紹介している。なお、川嶋氏は、「代替医療には科学的な検証が困難なものもある」、「日本では“代替医療は科学的エビデンスがない”として、代替医療を治療として認めないという医者がほとんどです」と書き添えている。しかし、代替医療で治る患者がいることも否定できない事実である。そのような人は私の周囲にもいる。

ご丁寧にも川嶋氏は、代替医療が問題視されるのは、「悪徳民間施術師」がいるからであると言い、その見分け方を、「①代替医療の提供者が、“これをやれば絶対に治る”と言う。②他の医療、とくに西洋医学を否定する。③一般に考えて、法外と思われる金額を請求される」として教えている。

私はこの本を読んで、「高齢者用の代替医療村＝川嶋氏の①～⑥まで網羅」を作り、医者や施術者も高齢者が担当するようにすれば、それはきわめて安価

で済み、面白いのではないかと思った。

2. 「養老孟司の人生論」 養老孟司著 PHP 研究所 2016年9月7日

帯の言葉：「私の人生では“新しい”こと、つまりまだ済んでいないことがあります。それは死ぬことです」

本書は、養老孟司氏の他の著書（「バカの壁」、「死の壁」など）と比較すると、若干、難しいように思う。しかも本書は、10年前、養老氏が70歳そこそこの時に書かれたものの再版であり、時差もあるような気がする。養老氏は本書について、「この本をあらためて今書くとしたら、どうするか。それは考えてみました。たぶんずいぶん短くなると思います。どんどん切り詰めちゃう。それで良くなるかって、それもわかりません。ただ、この本を書いた当時に比べて、頭の中で万事が簡単になったことは確かだと思います。ひょっとすると、それは、感情が整理されたからかもしれません。年齢を重ねると、感情は背景に引いていきます。同時に行動する動機も弱くなります。だからこの本をあらためて書けと言われても、書かないでしょうね」と、書いている。

養老氏は自分のことを、「ある意味では、私は戦争と全共闘運動の申し子なんです。鬼っ子というべきでしょうね」、「くどいようですが、そりゃ東大紛争のせいですよ。あれがなければごく並の研究者になってたかもしれません」と書き、「とくに対立がひどかったのは、一方の全共闘に対する民青系、つまり共産党系の学生達です。その民青系の都学連が、東大の御殿下グラウンドに千人を超える学生を集めて、“武闘訓練”なるものをやりました。私はグラウンドの外から見ていましたが、その時に学生たちが持っていたもの、それはなんと竹槍ですよ。まさに仰天しましたね。竹槍といえば、私たちの世代にとっては一億玉砕、本土決戦の象徴ですからね」と書いている。私は学生時代、民青系に所属していたが、関西であり、平和路線一辺倒であったため、竹槍など持ったことがないので、この養老氏の言は、にわかには信じられない。しかしもしそれが本当なら、その環境に身を置いていなかった運命に感謝するのみである。

養老氏は本書で、人生論というよりも、「ものの見方や考え方」についての持論を展開している。以下に紹介しておく。

・学会で大方の人が信じてるなら、「仮説じゃない」んですが、大方の人が信じていなければ「仮説」なんですよ。

・深沢七郎の「檜山節考」という作品は、その後の日本社会、老人大国を、別な面から予言しているように見えるじゃないですか。同時に共同体の消失も、

です。だから今はかえって読まれないのかもしれませんが。でもこの作品は戦後文学の最高峰の一つだと、私は思います。外国でも知られていないわけではありません。

・政治情勢があるていど緊迫すると、社会的には「関係ない」、「中立」などは存在しなくなります。そういうものは、むしろ敵よりも怪しからんものと、みなされるのです。そこが怖いんですよ。ポル・ポトの大虐殺を覚えておられますか。クメール人つまりカンボジアの人たちは、はじめはベトナムのシンパを排除するつもりだったんです。それがそのうち、犠牲者の数が数百万人という、自分たちの仲間の大虐殺になっていきます。大学紛争でいわば高揚した新左翼運動もまた、やがてさまざまなテロ事件、さらには赤軍派の内ゲバ殺人を引き起こしていくようになります。そうってからでは、もう遅いのです。そういう極端なことをするのは、「変な」人たちだ。あいつらは別だよ。日常のフツウの生活しか経験したことのない人は、そう思うことが多いと思います。それは違います。ごくフツウの人だって、いや、むしろ「ごくフツウの人」だからこそ、一億玉砕とか、ナチとか、ポル・ポト派のようになるんですよ。

・人は単純な解答を好みます。疑問に対して、きっぱりと、歯切れ良く答える。格好いいじゃないですか。でもそれはたいていウソです。単純で明快な解答がある場合も、もちろんあります。でもほとんどの場合には、「単純で明快な解答があればいいな」という希望なんですよ。

・一人当たりのエネルギー消費でいうなら、日本人はずいぶん省エネなんですよ。最近やや贅沢になりましたが、石油ショックのころでしたら、アメリカの1/4、ヨーロッパの半分でした。それしか使わないで、どれだけの経済効果をあげたか、考えてくださいよ。アメリカなんか、日本の何倍も儲けて当然なんですよ。他方、GDP当たりのエネルギー消費を見たら、ロシア、中国はひどいものです。それでわかるのは、日本の「世間」を社会システムの一例と見なすなら、世間というこのシステムは極めて効率が高いということです。世界がそれを見習っていいのです。

3. 「大往生」 永内輔著 岩波新書 初版：1994年3月 第97刷：2016年8月2日

帯の言葉：「“大往生”というのは、死ぬことではない。往生は往って生きることである」

今年7月、永氏は83歳で亡くなった。本書はその永氏が、今から23年前、60歳のときに、父親の死に際して書いたものである。それ以降、本書は97刷を経て、永氏の死後も版を重ねている。永氏は本書の最後で、自らに向け弔

辞を書いている。もちろん23年前、60歳のときである。その弔辞は、「永六輔さん。あなたは“大往生”という本をまとめて、タイミングよく、あの世へ行きました。あなたはいつも無駄のない人でした。そして、本当に運の良い人でした」という文句で始まり、「永さんがあの世へ往ったら先に往っている皆さんに、またあることないことしゃべりまくることでしょう。そうかといって、この世に帰って来られるのも迷惑です。三途の川に流されて、あの世にも、この世にもいないというのが、永さんらしい“大往生”だと思います」という言葉で終わっている。この「三途の川に流される」という発想は面白い。私もこのように痛快な発想で、人生を締め括りたいと思った次第である。

本書は、23年前に書かれたものであるが、老いや病、死などについての文章は、今読んでも、新鮮であり、その有効性を失っていない。また本書の冒頭で、当時の病院関係者の老人に関する川柳が20首ほど紹介されているが、そのほとんどが、現在行われているシルバー川柳大会でも上位に入選しそうなものばかりである。逆に言うとそれらから分かることは、この四半世紀、「死生観」についての考察が、巷ではほとんど進んでいないということでもある。以下に永氏の23年前の文章を紹介しておく。もちろん本書には、ここには紹介できないようなきわどい文章がある。そこにこそ永氏の「人生観」が現れていると思うのだが。

- ・老人ホームはお洒落な二枚目のお爺さんを探しています。素敵なお爺さんがいるだけで、お婆さんたちが、みんないいお婆さんになりますから。
- ・死にたいように死なせてあげたい。ホスピスの医者としてはそう考えるのですがね。こういう死に方をしたいというイメージのない人ばかりなんです。生き方ばかりじゃ最後に役に立たないんですけどね。
- ・歳をとると、だんだん世の中がつまらなくみえてくるんですよ。つまらなくならなきゃ未練があって死ねやしません。
- ・生きている目的は死ぬことです。だとすれば、見事に死んでみせようとするためには、今死んでも大丈夫なように生きるしかないんですよ。死ぬことを語るのは縁起の悪いことではなくて、楽しいことなんですよ。
- ・余生という生き方はなかなか複雑である。死にたくはないが時が来れば死なねばならない。しかもその死が間近に迫って来ている。生老病死という、そんな団塊みたいなものは、私たちにはもう要らない。毎日毎日が死との対立なのである。

副題：「老老介護の地獄度と、劣化する社会保障」

帯の言葉：「高齢・難病・障害…の人間なんてもういない？」

著者の柳氏は、現在75歳、7年前にパーキンソン病を発症し闘病中。柳氏の妻は71歳、柳氏を懸命に介護した結果、「筋・筋膜性腰痛症」という病気になり、要介護状態になってしまう。そして50年間連れ添った二人の仲は、「集積された憎悪のかたまり」となり、完全に「老夫婦が壊され」てしまう。妻は自らの苦しさの故に、それまでの従順さや貞淑さを捨て、柳氏を罵倒し介助しようとはしなくなる。柳氏は次第に暴力を振るうようになり、妻はそれを避けるためについに110番せざるを得なくなっていく。柳氏は本書の最後で、「老老介護の日々は、愛憎ないまぜだ。いつお互いの感情がもつれ合って殺人事件が起きても不思議ではない。どんな現場にも、そんな殺気が漂いがちだ。政府・官僚たちは知っているのか、一人一人の高齢者のこうした実態を」と書いている。たしかに、悲しいことだが、老老介護の現実、柳氏の言っている通りである。この本を読みながら私は、シルバー川柳の中にあった「恋女房、昔妖精、今妖怪」という句を思い出したが、現実はそのような甘酸っぱいものではなく、私なら「恋女房 昔妖精 今女夜叉」という句を作るだろうと思った。柳氏はパーキンソン病について、自身の体験を紹介しながら、「パーキンソン病との闘いは、文字通り“格闘”にふさわしい。常に体がしびれている。針で刺されるような痛みが、次々と別の新たな場所に移っていく。常態としてはそうだが、薬が効いているときは、副作用が出る。たえず大げさなやり方でボートを漕いでいる」と書き、症状がどんどん進み、最近では全身硬直が始まっているという。その体で柳氏が書いたものであるから、本書は分かりづらい箇所があるし、ジャーナリスト特有の小難しい部分もある。それでも柳氏の窮状は十分に伝わってくるし、「老老介護の現場は、あらゆるモラルを壊してしまうほどの修羅場である」ことを分かせてくれる。

5. 「人生を祝福する“古い”のレッスン」 バレンタイン・デ・スーザ著 幻冬舎

2016年8月25日

帯の言葉：「“自分”を手放し、“あるがまま”を受け入れ、前を向いて歩みなさい」

著者はインド人で、イエズス会の司祭であり、現在、日本の聖母病院で聖母ホームにおいて、患者の心のケアを行っている。本書には、その著者の高齢者向け「古いのレッスン」が書き留められている。ただし、そのほとんどはすでに多くのキリスト教系の宗教家が語ってきたことであり、新鮮な提言は少ない。

スーザ氏は本書で、「人類は最期の瞬間まで生きる意味を見つけようとする存在です。人と人との関わりを求め続け、さらには大いなる存在（神・仏）につながっていたいという気持ちを持っていることでしょう。人間を超える大いなる存在へ、謙虚に精神を向けていくこと、その心的傾向を“霊性”と呼んでもいいかもしれません」、「私は、“老い”とは悲しむべきものではなく、むしろ祝福すべきものであると、お伝えしてきました。私には、みなさんが体験してきた、喜び、悲しみ、苦しみ、すべてが結晶となり、美しい光を放っているように見えます」と書いている。

以上



【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 ^F 元)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012 年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013 年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
2014 年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
2015 年	6.9	5.9	10.7	1.4	9.7	6024	-9.8	-14.4	11.0	0.8	11.9	15.0
1 月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2 月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3 月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4 月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5 月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6 月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7 月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8 月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9 月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10 月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11 月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-7.2	-9.2	27.7	0.0	13.7	15.3
12 月	6.8	5.9	11.1	1.6	6.8	594	-1.7	-7.6	17.2	-45.1	13.3	15.0
2016 年												
1 月			10.3	1.8	18.0	633	-11.5	-18.8	14.1	-2.1	14.0	15.2
2 月			10.2	2.3		326	-25.4	-13.8	-11.3	-1.3	13.3	14.7
3 月	6.7	6.8	10.5	2.3	11.2	299	11.2	-7.4	26.1	4.0	13.4	14.7
4 月		6.0	10.1	2.3	10.1	456	-2.0	-10.5	21.4	2.9	12.8	14.4
5 月		6.0	10.0	2.0	7.4	500	-4.7	-0.1	43.6	-4.8	11.8	14.4
6 月	6.7	6.2	10.6	1.9	7.3	479	-6.1	-9.0	8.5	4.4	11.8	14.3
7 月		6.0	10.2	1.8	3.9	502	-6.4	-12.9	-3.8	-6.2	10.2	12.9
8 月		6.3	10.6	1.3	8.2	520	-3.2	1.4	13.2	0.5	11.4	13.0

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。